

「臨床の知」を学問としてどのように評価するか—序説

How to Evaluate "Clinical Knowledge" as a Discipline: An Introduction

西村 歩

Abstract

'Clinical knowledge' is the way of knowledge proposed by Yujiro Nakamura (1925-2017). It emphasizes the importance of individual situations, is deeply involved in the analysis of reality, and works to understand the meanings the world and others present to us in the context of mutual action. In this paper, we propose a methodology to conduct an ethnographic study of scientific technologists, which has been widely conducted in the sociology of science, this time targeting practicing researchers who are generating 'clinical knowledge.' This study is also expected to provide an important perspective for answering the normative question, "What should be the standards and frameworks for evaluating research on practice? "

(1) 研究テーマ

個々の実践活動から「臨床の知」を抽出する研究手法として「実践研究」が存在する。またこれまで科学社会学の分野では、科学技術者を対象とした民族誌的研究が広く行われており、その方法論についても一定の安定した評価が得られてきた。そこで本稿ではその民族誌的研究の方法論を、臨床の知を生み出す実践研究者の営みに対して適用することで、実践研究の学術的意義を再確認する足掛かりとなる方法を提案する。本研究によって獲得された質的データは、「実践研究を評価する基準や枠組みはどうあるべきか」という研究の第三者評価に関わる規範的問題を議論していく上での重要な視点提供となることが期待される。

(2) 研究の背景・先行研究

臨床の知とは中村雄二郎(1925～2017)によって提唱された概念であり、「個々のシチュエーションや場所を重視して深層の現実に関わり、世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに捉える働きをする知」として定義される(中村 1992:135)。中村は「科学の知」を「冷ややかなまなざしの知、視覚独走の知」であり、「仮説と演繹的推理と実験の反復から成り

立っているもの」とすれば、臨床の知は「諸感覚の協働にもとづく共通感覚的な知」であり、「直感と経験と類推の積み重ねから成り立っている」と対比して議論を進めている(中村 1992:135-136)。さらに普遍性・論理性・客観性によって構成される科学の知とは対照的に、臨床の知はコスモロジー(場所や空間を無性格で均質的な拡がりとしてではなく、一つ一つが有機的な秩序を持ち、意味を持った領界と見なす立場)、シンボリズム(物事には多くの側面と意味があるのを自覚的に捉え、表現する立場)、パフォーマンス(行為する当人と、それを見る相手や、そこに立ち会う相手との間に相互作用が成立していなければならないとする立場)を構成原理としてまとめている(中村 1992:133-135)。

また臨床の知を経験的に記述する研究手法として実践研究が挙げられる。臨床の知と研究プロセスにおける「実践」の関係の深さは、榎木や山中をはじめ、数多くの論者によって語られている(榎木 2015)(山中 2011)。ここでは改めて実践研究とは何かについて定義をする。社会学者の土倉は、「実践に参加しながら当の実践を研究対象にするもの」と定義している(土倉 2020)。また土木工学の論文誌で小林は「既往の土木技術の『適用』ではなく、『状況との対話を通じてフィールド的な知を生成する』こと」と言及している(小林 2010)。さらに心理学の領域では下山は「研究対象の現実介入し、適切な影響を与えるために、現実世界に積極に関与するようデータ収集の場を設定する」方法と述べている(下山 2001)。実践研究の考え方は分野によって差異はあるが、実践現場に埋め込まれた臨床の知を詳らかに記録していく研究である点では共通性があると考えられる。実践研究は、普遍主義・論理主義・客観主義を要素とする科学研究とは一線を画す新たな「研究」のありかたとして、デザイン学、教育学、心理学、看護学などの幅広い領域で広まってきた。「アクションリサーチ」「フィールドワーク」など対応する用語は様々であるが、現場での生身の実践活動を研究のプロセスとして用いる点で、本稿ではこれらをまとめて「実践研究」と呼称することとした。ここでいう「現場(フィールド)」とは研究者によって設定された人工的な実験空間のことではなく、「当事者たち自身のリアルな動機や目的にもとづく自発的な活動が繰り広げられる場」を指すもの(伝 2015)と解釈する。

実践研究を通して報告される臨床の知は科学の知と対置される以上、実践研究論文の学術雑誌への掲載可否を評価するうえでは特殊な査読基準を設けなければならない場合もある。例えば 2015 年に発刊された「認知科学」誌の実践研究にも深くかかわる特集号「フィールドに出た認知科学」では「普遍性や客観性のみを一律に要請するのではなく、論文で主張されている結論

を導く上で理にかなった研究方法となっているかを柔軟に判断する」「当該フィールドの固有性や独自性と正面から対峙した研究を本特集との関連性が大きいとして評価する」などが編集委員より査読者に通達されたという(伝2015)。このように臨床の知特有の状況依存的な知識を生成、報告することを承認している論文誌(特集号)が一部ではあるが見られるようになっている。

しかし実践研究のような臨床の知を抽出する研究がまだまだ主流となっていないのは、多様なシンボリズムが内包される実践をどのように解釈して記述すべきかについて難点を抱えているからである。近代科学においては「再現性」や「検証可能性」が研究の信用性の指標として優遇されており、佐倉によれば科学的知識とは「仮説—演繹サイクル」を何度も繰り返すことで事実認定を図るという基本形があるという(佐倉 2020)。その反面、臨床の知とは、再現可能でもなければ、偶然が積み重ねられた条件下における知が記述されたといえるため、追検証することは不可能であり、知識としての信頼性は科学の知と比べると相対的に低く見なされてしまう。果たして実践研究を通して状況依存性が高い知識としての臨床の知を生成し、学術的な場(学会や論文誌)に報告することの意義とはいかなるものであろうか。

(3) 筆者の主張

本稿は実践研究により生成される臨床の知は、科学的客観性に比肩しうる学術的意義を有する知であるという認識がより浸透すべきという立場に依拠する。しかし実践研究にはいかなる学術的意義が存在するのか、また実践研究が研究として求められる基準や評価するための枠組みについては十分に整理されてこなかった。だがそうした研究が全く行われてこなかったわけではない。市川の研究では「教育心理学研究」の編集委員を対象に、どのような論文が実践研究論文として適切であるかについての実証的な調査を行っている(市川 1999)。しかし市川の研究の場合はいくまで「学会の編集委員」という審査に携わる立場から一方的に実践研究を評価したに過ぎず、実践研究から生み出される臨床の知の特性への理解は十分ではないと解する。

そもそも実践研究者とは「研究者」でありながら、現場で活動する「実践者」であるという二面性を有する。例えばデザイン学における実践研究者にとっての成果物の半分が論文であり、もう半分が現場で実際にデザインされた事例やアーティファクトである。個々の研究者にとってどちらが重要であるかも千差万別であり、必ずしも論文が最終成果物になるとは限らない。このような二面性を持つ実践研究者から、どのような意義が込められて臨床の知が生成され、学会に報告されているのかという実状の把握をしないことに

は、実践研究の強みや必要性、知識としての潜在能力が活かしきれない実践研究の評価枠組みが整備されることになりかねない。本稿ではこうした実践研究者の実状に向き合いながら、実践研究の学術的意義を再確認する足掛かりとなる研究手法を提案する。

具体的には Bruno Latour や Karin Knorr-Cetina に代表される科学技術者を対象とした民族誌的研究を、臨床の知を生成する実践研究者を対象に実施する方法である。Latour は Stephen Woolgar と共に執筆した『実験室の生活—科学的事実の社会的構成(Laboratory Life: the Social Construction of Scientific Facts)』の中で、カリフォルニアにあるソーク研究所の神経内分泌学の研究室を舞台とした現場研究を行い、非専門家としての立場から、科学者の仕事の流れを明らかにすることに取り組んだ(Latour 1979/1987:2)。一方で Knorr-Cetina は“Epistemic cultures: How the sciences make knowledge”の中で、科学研究者の「認識論的文化(Epistemic cultures)」の解明を試みている。認識論的文化とは「知識を創造し、保証する文化」のことであり、科学研究における「知ること」の仕組みの理解を進めている(Knorr-Cetina 1999:1)。Knorr-Cetina は本著で高エネルギー物理学と分子生物学という二つの分野の研究室への長期的な滞在・観察を試み、学問間の知識文化の比較を行った。科学の目指す真理や中心的要素がどの分野においても普遍的に共通しているという「科学の単一性」を批判的に検討し、実際には科学の分野・領域によって特性が分化しており、認識論的文化の多様性が存在する旨について議論している(Knorr-Cetina 1999)。Knorr-Cetina のアプローチは研究者が生成している知識の内容から科学者の特性に深く立ち入った観察といえる。

ここで科学社会学の議論を踏まえて、改めて本研究の目的を確認すると、臨床の知を生成している実践研究者は自身の実践研究にいかなる学術的意義があると考えているかについて、その認識についての現状把握を試みることである。この目的に向かうには、知識が生み出されていく過程に注目する Latour のアプローチでは、実践研究者の知が構築されていくプロセスを俯瞰するには有効であるものの、一方で「学術的意義」という個々の研究者が有する価値観に迫りきることは難しい。寧ろ個々の実践研究の内容から実践研究者の認識にまで踏み込んでいく手法の選択が求められる。この点本研究では、Knorr-Cetina の研究を一部参考に、臨床の知を生み出している実践研究者を対象とした民族誌的研究を通して、実践研究者が自ら生成する知の意義とは何か、その認識について深く理解することを提案する。

具体的な手法としては、まず実践研究者の日々の研究活動を舞台とした参

与観察を行い、実践から学術知を生成する過程における研究者の行為や会議、日常的な会話に至るまで厚く記録していく。Knorr-Cetinaの研究においても調査対象の研究室に長期的に駐在し、研究者の会議や雑談などの音声を録音していたとされるが、こうした記録化は「資料の収集」以外にも重要な意味が内包されていることが伺える。科学者の営みを分析する上では、何より観察者自身が対象分野の内容について学習していくことが求められる。そこで録音記録の存在は、科学者たちが議論している高度かつ専門的な技術的詳細について学習する上でも役に立ったと語られている(Knorr-Cetina 1999:21)。実践研究者の認識を分析していく上でも、対象となる分野について学習し、精通していくことは不可欠と考えられる。但し本研究の対象にあたる実践研究者は、現場における動的な活動の中で内省的に知を生成していく特徴があるため、録音のみでは実践研究者の営為を捉えるには情報量が乏しい。実践研究者の発話内容だけでなく、フィールド内での立ち位置、移動、振る舞い、コミュニケーションに至るまで克明に記録できる映像データを用いることが望ましく、ビデオカメラを用いた参与観察の方法論が応用できよう。

また実践研究者を研究対象とする場合、観察者自身が対象者と同じ場に身を置き、そこで起きている現象を内側から観察する方法論としての「二人称的アプローチ」(諏訪 2019)も利用可能性があると考えられる。ここでは諏訪の解説(諏訪 2019)を参考に二人称的アプローチについて説明する。例えば最初は観察者の一人称目線で対象者を観察するが、対象者と同じフィールドに身を埋めることで、徐々に対象者の思考回路が推測できるようになる。このような一人称(観察者の私)と三人称(対象者)両者の立ち位置を往復し続ける中で共感的感覚が観察者に醸成されていくアプローチといえる。そこで実践研究者を対象として二人称的アプローチを用いるならば、まず実践研究者と観察者が同じフィールドで関わっていく中で、徐々に実践研究者の思考回路や趣向について見え始めてくる。そこから観察者は実践研究者の営為や特徴を説明する言葉を考えることにもなる。これらのプロセスを経て、観察者は実践研究者がどのようにフィールドと向き合い、活動し、臨床の知を抽出し、記述しているかに関する理解が共感的に進んでいく。また以上のような二人称的理解が進めば、文献上で語られることが少なかった、実践研究者が臨床の知を生成する上での苦悩や葛藤についても克明に記録に残していくことも期待される。

加えて研究者の特徴的なアウトプットである「論文」など文献データの取得も重要である。Knorr-Cetinaは研究室への駐在中に録音資料の他にも、すべての会議の透明資料、内部メモ、講演、論文についても取得できたと語っ

ている(Knorr-Cetina1999:22).確かに論文の内容は高度に専門化された内容であるため、観察者にとっては理解しえない場合もあろう。しかし Knorr-Cetina が物理学者に長年の間インタビューを繰り返したように(KnorrCetina1999:22),民族誌的研究の利点として、論文に記述されている内容について実践研究者などにインタビューすることで記述内容の詳細についての情報提供を求めることができる。観察者は実践研究者が生成した知の内容についての理解が進むと同時に、論文中に記載されている学術的意義についての根幹に迫る質問をすることで、実践研究者が論文の中では言及していない、新たな学術的意義がそこで語られることも期待される。

前述の映像データや観察者による二人称的叙述、さらにインタビュー等の質的データを統合的に分析することで、実践研究者が「実践」と「研究」の狭間でどのような意義を創出しようと考えているのか解釈を加えることも可能となろう。また看護学・デザイン学・土木学・教育実践学など複数学問間の実践研究者の比較を行えば、実践研究の学術的意義に関する認識の多様性を捉えることや、逆に領域横断的な実践研究者の認識が存在するのかを考察する展開も考えられる。

(4) 今後の展望

前章では科学技術者を対象に行った民族誌的研究を、今度は臨床の知を生成している実践研究者を対象として行う方法を提案した。本調査で明らかになるのは実践研究者の自らの生成する知に対する認識と研究者本人が実践研究を通してどのような知的貢献を果たすのかという研究観についてである。

しかしながら、あくまで本調査で得られた質的データは実践研究者自身の自己認識に踏みとどまってしまう。そもそも実践研究者自身の認識による「実践研究の在りかた」と、査読者や編集者らの認識による「実践研究の在りかた」は必ずしも同一とはいえない。大元の問いかけである「臨床の知を学問としてどのように評価するか」という研究の第三者評価についての議論を行う上では、実践研究者の認識を理解するだけでは不十分であり、それらが査読者や編集者にどのように受容されるのかを検証する必要もあろう。そこで以下では、前章の議論の展開可能性として、実践研究の第三者評価について考察するための発展的研究について展望する。

具体的にはこれまでの民族誌的研究に、前述の教育心理学における市川の研究で採用されたアプローチ(市川 1999),すなわち論文の審査に関わる立場を対象者とした実証分析の手法を組み合わせることを提案する。例えば、まず前章の調査で得られた質的データを KJ 法やグラウンデッド・セオリー・

アプローチ(GTA)を用いたラベリングやカテゴリー化を図ることで、「実践研究の学術的意義」にかかわるいくつかの鍵概念を抽出することが想定される。その上で生成された鍵概念の一つ一つを査読者や編集委員に「論文を審査する立場として、この鍵概念は学術的意義として承認できるか」を問いかけ、5件法（非常に承認できる、承認して問題がない、承認すべきか迷う、どちらかといえば承認できない、学術的意義にそぐわない）で評定してもらうことで、どの鍵概念が好意的に受け止められ、逆に受け止められていないかを実証的に検討することが期待される。

以上のような研究は、実践研究者と論文審査に携わる立場の認識のずれが見える化する試みとなろう。こうした研究が存在することにより、実践研究が有する知の価値を見直していくための問題提起が各分野で行われていくと同時に、今まで注目されることがなかった、科学的客観性に比肩しうる実践研究ならではの新たな学術的意義の在りかたが提出されることも期待される。

(5) 参考文献

Bruno Latour, Steve Woolgar, 1979, *Laboratory Life: The Social Construction of Scientific Facts*, SAGE Publications, Inc.

— 1987, *Science In Action: How to Follow Scientists and Engineers Through Society*, Harvard University Press, (邦訳：川崎勝・高田紀代志(訳)：「科学がつくられているとき—人類学的考察」, 産業図書, 1999).

Karin Knorr-Cetina, 1999, *Epistemic Cultures: How the Sciences Make Knowledge*, Harvard University Press.

市川伸一, 1999, 「「実践研究」とはどのような研究をさすのか」, 『教育心理学年報』, 38巻, 180-187.

小林潔司, 2010, 「土木工学における実践的研究：課題と方法」, 『土木技術者実践論文集』, Vol.1, 143-155.

佐倉統, 2020, 「科学とはなにか—新しい科学論、いま必要な三つの視点」, 講談社ブルーバックス.

榎木哲夫, 2015, 「実践の知としてのデザイン」, 『計測と制御』, 54巻7号, 455-461.

下山晴彦, 2001, 「臨床における実践研究」, 南風原朝和, 下山晴彦, 市川伸一編, 『心理学研究法入門—調査・実験から実践まで』, 第七章, 191-218.

諏訪正樹, 2019, 「二人称的（共感的）関わり—共創現象を解く鍵」, 『共創学』, Vol.1, 39-43.

- 土倉英志，2020，「変わりゆく実践研究と実践研究における研究者の役割：サイエンスカフェの実践研究のエスノグラフィ」、『認知科学』，27 巻 2 号，192-205.
- 伝康晴，諏訪正樹，藤井晴行，2015，「特集「フィールドに出た認知科学」編集にあたって」、『認知科学』，22 巻，1 号，5-8.
- 中村雄二郎，1992，「臨床の知とは何か」，岩波文庫.
- 山中恵利子，2011，「看護行為の体験と臨床の知—シュッツのレリヴァンス概念を用いた 2 人の看護師が語る「看護行為の体験談」の分析—」、『人と環境』，Vol.4，1-8.

(慶應義塾大学)